

地上に降りた女神たち

琴座の大志館

2章 大志館での修行

vegagee

A night view of a city with many colorful lights, possibly a festival or a large gathering. The lights are arranged in patterns and colors, creating a vibrant and festive atmosphere. The word 'vegagee' is overlaid on the image in a stylized, light blue font.

1. 反省修行

朝5：00に枕元に備え付けられている目覚ましが鳴った。
ベットから手を伸ばして、アラームを止めた信次は素早く起き上がると、
電子レンジのような機械のパネルに触れ、「バタートースト2枚と、サラダ、それにハムエッグ
とコーヒーを」と
食べたいものを告げてそのまま、階段を下りてバスルームに向かった。

信次があてがわれた部屋は、幅が3m奥行きが4mほどの六畳間だが、ただの六畳間ではなく、
入り口から入って右方向に1mほどの下り階段、左には1mほどの登り階段になっている
2階建て構造になった部屋だった。上の階にはベットや机がおいてあり、下の階には、
トイレや洗面所、バスルームなどが設置してあった。

シャワーを浴びて、黒の作務衣に着替えると、また2階に戻って、
先ほどの電子レンジのようなものの扉をあけ、そこに出来上がっている朝食を摂った。

薬局に見えるようにカモフラージュされた、宇宙人向け宿泊施設「大志館」に就職して1週間
が過ぎた。

就職したその日に、天之川竜子館長から与えられた指示は非常に変わったものだった。

とにかく1日中、誰とも話をしてはならないと言われ、礼拝堂の椅子に座り、
ひたすら自分が生まれてから今日までに起きた、さまざまな出来事を思い出し、
自分が相手にしてもらった事と、してあげた事をノートに書き出して、
夜になると、今日の気づきを、館長に報告しに行くのだった。（このときだけ話すことをゆるさ
れていた）

部屋を出るといつものようにエレベーターのようなものに向かった。
「～のようなもの」と表現したが、あくまでも信次が知っている電気機械に似ているのでそう表
現しただけで、
冷凍食品を入れてもいないのに、食べ物が急に出てきたり、上下に動いている気配はまったくな
いのに
別のところにたどり着く、これらのシステムがどうなっているのかは、信次には全く解らな
かった。

しかし地球より千年も進んだ文明なのだから、解らなくて当たり前だど、内心開き直って、
「礼拝堂へ」と行きたい場所を言葉に出しながらイメージした。

扉が開くと、ギリシャのパルテノン神殿のような空間の礼拝堂に着いていた。
信次のあてがわれた2階建ての部屋もそうなのだが、外見は3階建てにしか見えない

ベガ薬局のどこにこんな空間があるのか、信次はよくわからなかった。

礼拝堂の一番奥には高さが7 mはあると思える黄金に輝く巨大な神像が鎮座していた。神像の足下には、4 m四方に一つの椅子が5行、10列並んであり、そこに座ると、床の正方形の4隅から斜めにレーザー光線のようなものが発せられピラミッド型に覆われる様になっていた。

ピラミッドは赤や黄色に美しく輝いていて、中が見えなくなっていた。

信次は空いている席に座ると、眠らないように目を半眼にして、呼吸をゆっくり数えた。ピラミッドの壁は空気は通るのだが、音は全く遮断されるようで、自分の心臓の音が聞こえるようなぐらいの静寂さのなかで、瞑想するのだった。

瞑想は結構好きで、土産物屋のバイトが終わった後に、よく大仏の前で、やっていたので問題はないのだが、スマホも取り上げられ、テレビや新聞や本もなく、こちらからは人に話しかけてもいけないと言われて情報が何にも入って来ないことに、最初は気が狂いそうになった。

ようやく3日目ぐらいから慣れてきて、自分の心を見つめるという作業がどういうことなのか、
、
少しずつ理解できはじめた。それに伴って、初めは全く思い出せなかった小さい頃の思い出がその時の、
自分の感情までリアルに思い出せていった。

そして、何が原因でそんな感情を持ったのかまで理解でき、そのことについて、一つずつ反省をしていった。

不思議なことに一つ反省が終わると心が軽くなる感じがした。

また、今朝のシャワーの時もそうだったのだが、鏡に写った自分の目がテカッと光っているような気がした。

誰かが前にいるような気がした信次は半眼を少し開いた。
すると、目の前に金髪の男性が足を組んで座っていたのだった。

（あなたは誰だ？）信次がそう思うと、頭の中にダイレクトに声が聞こえた
（君の守護霊だよ。やっとしゃべれたね）と。

2. 守護霊との会話

（守護霊だって？）信次は驚きながら、その金髪の男性を観察した。
目の色と髪の毛の色が違うだけで、かなり自分に似ている感じがした。

（似ているのは当たり前だよ、だって僕と君は同じ生命エネルギー体の一部だからね）

1週間前の館長の話と同様に、守護霊の話もかなり衝撃的だった。

要約すると、あの世の世界は4次元、5次元、6次元、7次元・・・というように多重構造になっ
ていて、

高次元に行けば行くほど、光のエネルギー量が多くなり、また光の波動が精密になるのだという
。

そして、この地球霊界には500億人もの霊人が存在するが、そのほとんどが4次元や5次
元と、

この3次元世界を何度も生まれ変わりをしながら活動していること。

それに、歴史に名前が残っているような人は6次元ぐらいから上のレベルの霊人がほとんどな
のだが、

高次元の霊人は人数が少ないので、同じ霊人が時代や国を変えて出てくるが多いらしく、

例えば、ギリシャの賢人ソロンが聖徳太子として、日本に生まれ、その後リンカーンとしてアメ
リカに生れたり、

哲学者アリストテレスが中国に無門慧開和尚として生まれた後、日本に哲学者西田幾多郎として
転生しているのだという。

（じゃあ、国が違うからって、いがみ合うのは間違っちゃってこと？）

（そうさ、最近では中国人や韓国人が日本人を嫌って、よく抗議してくるけど、

過去世では自分が日本人だったかもしれないし、中東でも、アラブ人とユダヤ人が紛争を起こし
てるけど、

過去世は国籍が逆だった可能性もあるのさ）

（なるほど。でも、一つ疑問なんだけど、どうしてみんな過去の記憶を忘れてしまうんだい？

覚えていれば、もっと効率のいい人生が送れるんじゃないか、自分の過去世が今、憎んでいる
国だったら、

攻撃する気持ちがなくなるだろうし、あるいは、過去世イギリス人で英語を話してたんなら、
今世は勉強しなくても、英語がわかるわけだし）

（まあ、そういう考え方もあるけど、神様としては、この世は魂の修行の場所だから、一旦、
すべて白紙に戻して、ゼロから自由に人生を作れるようにした方が、魂が鍛えられると思ってる
んじゃないのかな、

それに成功した過去世ならいいけど、前世は飢え死にしましたとか、

戦争で、殺した相手が今回は、奥さんになっていた、なんてことを全て思い出していたらやりにくくて

しょうがないんじゃないか？まあ、あの世に帰ったら全て思い出すから、今だけのしんぼうさ）
（なるほどね。でもさ、過去世で大きな失敗をして、例えばヒトラーやスターリンのように多くの人を殺しちゃったらどうなるんだい？あ、でも肉体は死んでも魂は生きてるから殺したことにはならないから、大丈夫なのかな）

（いや、他の人の人生計画を狂わせることは悪だよ。そういう人たちは地獄で反省をさせられるのさ、何百年もね）

（地獄ってほんとうに存在するんだ）

（そうさ、さっき高次元に行くほど、光の量が多く、波長が精密になるっていただろう？地獄はその逆で、光の量が少なすぎて薄暗く、波動が荒い世界で、一応4次元なんだが、感覚的には、地下にあるような感じかな）

（そこから脱出するにはどうすればいいんだい）

（信次が今週ずっとやっていたように反省をすることだね。反省して、心の波長が整ってくれば、
地獄界の荒い波長と合わなくなって戻ってこれるさ、ただ、ヒトラーやスターリンは反省するどころか、

自分が地獄に落ちたのを神様のせいにして、積極的に地上の人間に取り憑いて人生を狂わせ、地獄の仲間を増やしている悪魔になっているから、彼らが戻ってくるには何億年もかかりそうでけどな）

（悪魔だって！）

地球霊界に初めて悪魔が発生したのは、今から1億年前のことらしい。

7大天使の一人だった、ルシフェルが地上にサタンとして生まれたとき、欲に溺れ、天国に帰れずに4次元の片隅に地獄界を作り始めたらしい。

それ以後1億年に渡り、地獄界を解消させようとする天使たちと、抵抗しているルシファーたちとの戦いが続いているのだという。

（なるほど、じゃあ僕の使命は、地獄の悪魔たちを、説得して改心させることかな？）

（違うね。いいかい、奴らは1億年も抵抗している、テログループのボスみたいなもんだぜ、ベガから来て、今回初めて地球に生まれた俺たちじゃあ、逆に取り憑かれて引きずりこまれるのがおちさ、

それに霊界のことは霊界の人にまかせておけばいいさ、

僕らは3次元世界に肉体を持った者でしか出来ないことをやるんだ）

（3次元世界でしかできないこと？うーん何だろう、ちょっとヒントをくれないか）

（そうだな、館長から、日本に救世主が生まれて、それをサポートする宗教団体が活動してるって話、
聞かなかったか）

(聞いたよ、母や妹は、そのサポートで活動しているんだろ。)

解った！僕も彼女たちと一緒に宗教の布教活動を手伝ってことだろ)

(近いけど、少し違うな。僕らの使命は、救世主のお財布になることさ)

(はい？お財布？)

3. 救世主のお財布

(3次元で活動している以上、いくら救世主といえどもお腹が空くし、住むところも必要だ。イエスやブッタの時代なら、托鉢して食べ物をもらい、森で寝起きすればよかったかもしれないが、

今の日本じゃ、そうはいかないだろう？ある程度お金が必要なんだ)

守護霊の声がダイレクトに頭のなかに響いた。

(なるほどね。でもさあ、ベガ星人の科学力があれば、簡単に金の延べ棒とか作れそうじゃないか、

あるいは僕の部屋にある、見た目は電子レンジなんだけど、好きな食べ物が自動的に出てくる、あの機械を貸してあげるとか・・・)

(人類が滅亡するような危機に陥らない限り、宇宙人が現在の地球にない、オーバーテクノロジーの機械なんかを使って介入してはならないことになっているんだ)

(そうなんだ、じゃあ今君と、こうやって心のなかで話していることは、宇宙人の介入にならないの)

(これは介入にはあたらないんだ。なぜなら、どんな地球人でも信次がやったようにきちんと反省して、

心の垢を取り除けば、守護霊からのインスピレーションを受けられるようになるからね。

やろうと思えば誰にでもできることは、介入とはいえないんだよ。

まあ、大志館の件はグレーゾーンかもしれないけど、いざとなれば君の記憶からは消されるだろうし、

たとえ消される前に警察か何処かに駆け込んでも、誰にも信じてもらえないだろうからね)

(そうか・・・。ベガ星人の科学力による介入が期待できないとなると、

もしかして、地球人の僕に働かせようってこと?)

(まあ、そういうことになるな。救世主のお財布役としては、1ヶ月に1億円ぐらいは、稼がないと失格だろうな)

「1億円だって、そんなの無理だよ！」驚いた信次は、思わず、大声を上げてしまったが、ピラミッド内に響いただけで外には漏れなかった。

(大丈夫だよ、いったい何のために君が異元悟さんの所に生まれたと思っているんだ)

(オヤジ？オヤジは、ただ丸太や木の根を削って仏像を彫ってる彫刻師だよ、

そりゃあ高い作品は数十万とかするけど、月に1億円も稼いでいるとは、とても思えないよ)

(金額じゃないんだよ。いいかい、オヤジさんは、丸太や木の根など、そのままあっても、あまり価値の無い物に、自らの才能と技術力を使って付加価値をつけてる、創造力の持ち主なんだよ。

これはベガ星人が一番苦手な、部分なんだ。それを間近に見るために、君はあそこに生まれたんだぜ。

君の歳で、月に1億円も稼ぎだそうとするなら、勤め人じゃ絶対無理だよ。
オヤジさんのように、創造力を使って、人々の役に立つ、何かこの世にない新しい物を
生み出さなければだめなんだよ)

天之川竜子は、信次の話を聞き終わると、ニッコリとほほえんで

「そう、守護霊と会話できたのねおめでとう。これで第一段階はクリアね。
それにしてもあなたの守護霊さんも、うまいこと言うわね。救世主のお財布になるべきだ、だ
っけ？

いいじゃない、なりなさいよ。1ヶ月に1億円も救世主に、お布施できれば、
ベガ星人の株も上がるってものよ」と楽しそうに言った。

「そうかもしれませんが、でもどうやって稼ぐんですか」信次が頭を抱えていると、
「信次。一つ教えてあげる。豊かになる第一の法則は、まず他の人を助けて、豊かにしてあげる
ことなのよ」

「他の人を豊かにするんですか？」不思議がっている信次に竜子は名刺を出しながら、
「信次。今日からあなたは、こういう人になるのよ」と言った。

名刺には {ベガ薬局専属コンサルタント 異元信次} と書かれていた。

「なんですかこれは」信次がいぶかってると

「地球人向けのベガ薬局では、カウンセリングもしてるのよ。先週、近所のケーキ屋さんの店主
から、

お店がうまくいなくて、眠れないって、相談を受けたのよ。そのとき、いい人がいれば紹介す
るからって

いってあるの。信次がコンサルタントになって、あのお店を立て直しなさい。

あなた大学で経営学を学んだんでしょ？」

「確かに勉強してましたけど、いきなりはちょっと・・・、それにそのお店を立て直したとしても
、

とても月に1億円の利益が上がるとは思えないんですが」

「男なら、つべこべ言わないの。館長命令よ、明日の朝から行きなさい」

そう言われて、しかたなく信次は身だしなみを整えると、次の日、そのケーキ屋に向かった。